東京学芸大学連続講演会　第３回

「日本のエコミュージアムの事例と展開課題」

井　原　満　明　氏
株式会社　地域計画研究所・
代表取締役

環境と経済の統合の場としてのエコミュージアム

皆さんこんにちは。井原といいます。今、大原先生がヨーロッパのエコミュージアムのお話をしました。私も大原先生と日本エコミュージアム研究会のメンバーとして、ずっとご一緒に活動してきました。一部大原先生の報告と重複するかもしれませんが、できるだけ私の言いたいところを特徴付けて話したいと思います。

私は都市計画を専門にしていますが、農村地域での地域づくり、まちづくりに関わっています。しかし、様々な計画ができても、その計画を実現するためには誰が担っていくのかといった課題にぶつかり、最近では、それを担う組織のあり方について関心を持っています。そんなところから先ほどご紹介にありましたように、まちづくりを進めるためには、地域づくりの組織を作って、そこが担い手となるようなまちづくりをやっていきたいなと、今は思っています。

今、NPO など、地域でのまちづくりを推進する市民活動も増えていますが、今必要なのは地域をマネジメントする人材というのが、どうしても必要になってくるでしょう。それは決して建築とか都市計画とかいう専門だけではなく、地域をマネジメントする、あるいは地域を経営していくような、そういう組織と人材がこれからどうしても必要になってくるだろうと思っています。ですから最近は、計画を推し進めるのではなくて、むしろそれを担っていく人達とどうやって一緒に考えていったらいいのかというところに関心を持っています。

ご紹介にありました岩手県東和町では、まちづくり会社を設立して、行政の出資を受けた第３セクターですが、NPO 法人のように自分たちで運営しています。フランスのエコミュージアムも NPO のような非営利組織が担っています。エコミュージアムを形態だけでなく、運営などの組織的な面を考えることも必要です。非営利組織がそれをきちっと担っているというのが、エコミュージアムの事例でもあると思うのです。残念ながら、日本では、非営利組織がエコミュージアムの運営などを担っているケースはそれほど多くはないのです。

前置きはそれくらいにして、日本におけるエコミュージアムの事例とこれからの課題をお話ししたいと思います。私自身は、今、まちづくりも大きな転換期に来ているという考えがありますので、これからのまちづくりにエコミュージアムがどのように関わっていくのかという視点も含めて考えていきたいと思います。

(以下、パワーポイントを使い説明)

初めは大原先生と重複しますので、省略しますが、基本的な点で私の考え方を述べておきます。まず、エコというのは、ギリシャ語のオイコスを語源に持つと言われています。その意味は、家とか家庭という意味があるというのが先生からもありました。もうひとつ強調したいのは、オイコスは、現代のギリシャ語でイコスと発音しますが、家・家族という概念だけではなくて、会社という概念があります。つまり、エコの語源には「環境」と「経済」という概念が共存しているということです。また、エコロジーの「ロジー」というのは、生きるための智恵で、エコノミーの「ノミー」というのは生きるための規則であるとも言われています。生きるための智恵というのは、これはエコロジーという環境の枠の中での生き方、生活の仕方ではないかと思います。また生きるための規則というのは、持続性が必要でそれを支えるための経済基盤という意味ではないかと思います。そういう考え方をすれば、エコというのは、エコロジーとエコノミーの両方の概念を持っているのではないかと私は思っております。それともうひとつ、フランスでは学校をエコールといいますので、エコノミーとエコロジーの２つのエコと学ぶ場であるエコールのエコをもじって、「2 つのエコと 1 つのエコ」という方もおります。ですから、エコミュージアムのエコは環境と経済の両方の概念を持ち、さらにミュージアムという従来博物館が持っている、学ぶという機能があります。いずれにせよ、エコミュージアムのエコはエコロジーという概念だけではないことを強調したいと思います。

また、博物館やエコミュージアムの定義がありますが、国際博物館学会では、「社会とその発展に貢献し」という規定があります。でもエコミュージアムでは、「地域社会の発展に寄与することを目的とした博物館」という言い方をされています。実はここがまちづ

くりと関係してくるだろうと思います。「地域社会の発展に寄与することを目的とした博物館」とは一体どんな博物館を意味するのでしょう。皆さん、まちづくりって様々な考え方があるかと思いますけれども、基本的にやはり地域社会の発展ということが、まちづくりの基本的な考え方だろうと思います。ここに私はエコミュージアムというものが、まちづくりにとって非常に重要なキーワードじゃないかと思っております。

では、これからの新しい地域づくりを考えるうえで、エコミュージアムの考え方がどのように絡み合うのでしょう。ひとつは、経済優先から転換した地域づくりです。先ほどエコというのは、「環境」と「経済」の両方の概念があるといいました。日本では、長い間、環境と経済(開発といっても良いですが)というものは、対立するものとして捉えています。環境を保全する、自然を保全すると、開発ができない。で、開発を進めようとすると自然を破壊しなければならない。こういう考え方が根底にあったと思います。でも、もしエコミュージアムのエコが、環境と経済の両方の概念を持つとすれば、経済を優先する地域づくりから「環境」を基本に据えながらそこに経済性を見いだす地域づくりが、エコミュージアムではないかと思います。ですから私はエコという言葉から、環境と経済の統合を目指すまちづくりでもあるというふうに考えたいと思っています。

それからこれはあとで詳しく言いますけれども、大原先生はエコミュージアムを構成するひとつひとつをサイトという呼び方をしておりました。私はサテライトという呼び方をしますけれども、同じようなことと思います。それで、先ほどのパネルで「コミュニティービジネス」という言葉がありましたが、私もサテライトは、「コミュニティービジネス」の一つであろうと考えています。コミュニティービジネスを考えていく上では、コミュニティという限られたエリアで成り立たせるビジネスですから、エコミュージアムの区域で成り立つビジネスと考えられ、それを運営するためには、「支えられる経済性」と「支える経済性」というのをどう結び付けていくのかというのが必要だと思います。それからエコミュージアムは地域の資源を地域で活かす地域づくりだ、と考えたいと思っています。地域の発展に寄与することを目的する一つの機関、ミュージアム、博物館であると考えても良いと思います。

その時に、地域に賦存する小さな資源を活かしたサテライト（小さな博物館）が無数にあることが、豊かなエコミュージアムを形成するともいえるでしょう。そのように地域資源を守りながらそれを維持する経済性を生み出し、そこが地域にとっては自らの資源に地域の再発見があり、来訪者に対しては地域を楽しく学ぶ場である、そんな小さなサテライトづくりもエコミュージアムでは必要です。

それからこれはエコミュージアムとは離れますけれども、エコミュージアムでも従来の博物館でも、その対象を「遺産」とかそういう言葉で使っていますけれども、私は地域資源という風な見方をしたいと思っています。その地域資源とは一体何なんだろうかということも重要なことです。

これは、永田恵十郎先生という今はもうお亡くなりになりましたけれども、先生とご一緒に仕事をしていた時に、先生から「地域資源は一般資源と異なる３つの要素を持っているんだ。」ということを教わりました。ひとつは非移動性です。土地や気候などの地域資源は人間による空間的移動ができないということですね。つまり簡単に言えば、北海道の気候を、九州に持っていったりすることはできないですね。2 つは有機的連鎖性ということをいっています。森林とか水、高地など、有機的連鎖を持っており、この連鎖が破壊された時、地域資源の有用性が失われてしまうという考え方です。例えばおいしい米はおいしい米だけで存在するのではなくて、そこにはきれいな水がある。きれいな水は豊かな森林がある。だからおいしい米がとれるんだ。そういうひとつひとつの資源が繋がっているだということです。ですからある部分だけを切り取ったとしても、それが地域資源として成り立つことではないのです。

ただし資源といった場合にはこれの逆で、移動することもできます。例えば北海道で採ったものを東京に持ってきて売ったりすることはもちろんできます。それは資源としての活かし方がそうなのですが、地域資源といった場合には、この非移動性と有機的連鎖性がある。で、この２つの性格から非市場的な性格を持っているということを永田先生は言われています。そして、その２つの性格から、市場メカニズムには馴染まない性格を持っている、それを簡単に図化するとこんなよう形(パワーポイント参照)になって、結局、地域資源は地域で活かすことが必要なんだ、ということが言えると思います。実は、私は、この考え方がエコミュージアムにとって非常に重要な考え方ではないかと思っています。

この辺も少し省略します。エコミュージアムにはテリトリーという一定の区域があります。どんな区域で

もいいのです。小金井市なら小金井市でも良いです、あるいは何々町でも良いです。あるいはもっと広く、ひとつの流域みたいな区域でも良いです。

それからコアというのがあります。中核となる施設、総合案内所、あるところに行って様々な情報を得て、それから自分の行きたいサテライトへ行くというところがコアです。ただしこのコア自体が、最近ではサテライトとなってお互いに連携しあうような動きも出ています。逆にひとつひとつのサテライトがコア的な機能を持って、他のサテライトを紹介するようなこともあります。あとで事例でお話します。サテライトというのは地域資源の保全と活用、その歴史文化を正しく学ぶ場でもあり、環境と経済の統合する場であるということです。

4つの世代から見るエコミュージアム

それから大事なのは、しっかりとした運営組織が必ずあるということです。日本では、NPO の法律ができて6、7年ですから。ヨーロッパでは100年も前にできているわけですね。フランスで言えばアソシエーション、英国ではトラストという、そういう非営利組織の法律そのものが100年前にできているわけです。ですから日本では、なかなかこういう運営組織を作るというのが定着していませんけれども、いずれにせよ、そういうエコミュージアムを運営していくような組織というのが必要です。

これは一つの模式図で、日本でのエコミュージアム導入に貢献されている丹青研究所の資料から引用させていただいていますけれども、真ん中にコアというものがあって、それぞれサテライトがあるわけです。サテライトの中には自然遺産とか文化遺産、右の方にいくと産業というのがあります。左の方へ行くと公共施設まであります。公共施設も一つのサテライトとして考えられるということですね。

エコミュージアムは、大原先生のヨーロッパでも様々なタイプのエコミュージアムがあったと思います。日本でも全くそうなのですが、経過で考えると、第一世代というのは地域資源が無数に存在する、農村地域でスタートしています。先ほど、大原先生がバッセーヌエコミュージアムを紹介いたしましたけれども、そこは地方自然公園と同時に農村地域でもあるんですね。そういう農村地域が、地方自然公園になっているというケースが、フランスの場合は非常に多いようです。自然国立公園の場合は、自然性の高い地域での指定になりますけれども、地方自然公園は農村を含む場合が多いのです。第一世代はそういう地域資源が無数に存在する農村地域です。

第二世代が、かつて地域に繁栄をもたらした産業資産、先ほどもお話にありましたけれども、足尾銅山とかですね、私も多くの山村に行きますが、かつての銅山跡地などは、公害もあり、今ではほとんど人は住んでいない。昔ここに映画館があったという敷地跡とか、ここには集落跡とか、様々な娯楽施設など、その当時の繁栄を偲ぶというか、非常に衰退している地域が日本にもたくさんあります。産炭地域などもそうだろうと思います。第二世代はかつて地域の反映をもたらした、産業資産ということです。

第三世代は文化を担うエコミュージアム、アメリカなどでは、スラム街をスクラム&ビルドで再開発していきますが、ここ十数年、二十年ぐらい前から大きな転換期に来ています。一見衰退しているスラムでも、そこには有名なスポーツ選手が住んでいたとか、あるいはジャズシンガーが生まれているだとか、あるいは黒人の文学作家が生まれ育った地域であると、そういった所を単純にスクラム&ビルドで開発して良いのかといったことがあって、それらの文化的な資源を活かすまちづくりというのが動き始めています。

それから第四世代に行くと、先ほども川のお話がありましたけれども、流域や鉄道を軸とした交流連携、日本では道路が発達する前までは、流域が交通軸でもありました。それが近代化になって、流域軸というものが無くなっていきます。そういう交通軸から海岸線に沿うような横の交通軸に変わってきていくわけですね。そうすると川上と川下の流域軸というのが失われていきます。その失われつつある文化などに光を当てることです。

こういうことを考えると、私はエコミュージアムというのは過去のまちづくりから現代に、そして未来に引き継ぐようなまちづくりが必要になってきているのではないかと思います。

日本で考えると、第一世代というのは何かというと、担い手の少なくなってきている農山村地域の再生です。それから第二世代では、産炭地域とか、鉱山、公害地域の再生です。第三世代は、中心市街地、これも衰退していますね。私の関わっている東和町では、中心市街地の活性化で毎週行っていますけれども、日本で中心市街地が成功した事例というのは、ほとんどといって良いほどまだ無いです。それだけ難しい状況になっていますけれども、中心市街地というのは元々地域の文化や歴史を担っていたわけです。そういう地域が衰

退している。歴史的な町並みについても、なかなかそれを維持･継承していくのが難しい状況です。いくつかの成功事例はありますけれども、そういう意味で、第三世代です。

それから第四世代は、流域や鉄道を軸とした、交流･連携というものです。川下と川上の交流とかです、先ほど多摩川のエコミュージアムの話がありましたけれども、川をつたって、一つの連携･交流を図っていく。あるいは塩の道などの、これも色々と全国にありますが、こういうものをもう一度再生して新しい地域連携みたいなものはできないだろうかと思います。

いくつかの事例を説明していきますと、まず、第一世代、地域資源が無数に存在する農村地域です。これは国の事業で、田園空間博物館整備事業という農水省の事業です。この事業は全国で数十箇所進められていると思います。フランスのエコミュージアムというのはもちろん自然を活かしながら一つの事業体として経済活動を行っているわけです。そういうことから考えると、単なる自然環境だけではなくて、農村の場合、環境も維持され、そこで農業という経済活動が行われているとすれば、農水省もこのエコミュージアムを取り組むことが必要なんじゃないかという発想で進められているとも思います。

各地の事例紹介

その例が兵庫県にある北播磨田園空間博物館です。田園空間整備事業のモデルでもあります。ここではNPO 法人を作っています。それでちょっと見にくいと思うのですが、これは、数市町村を包括する大きな区域の中で様々なサテライトを作っているんですね。で、これがコアとなるような道の駅です。道の駅をひとつのコアとして、ここに来た人を、先ほど前に示した、様々なサテライトの資料を紹介しています。こういう風に中に入ると、北播磨田園空間博物館のサテライトということで、色んなサテライトを紹介しています。

で、北播磨の紹介をいたしましたけれども、私は行って疑問を持ちました。どんなサテライトがあるのかというと、色んなお店、ラーメン屋さんもあればあらゆるものがサテライトとして位置づけられているのです。説明してくれた人に、何でこれがサテライトなのでしょうか、と聞いたときに、いや何でも良いんですよ、というようなことを言われました。それは何かというと、そこでは毎年サテライトを紹介する冊子を作っているんですね。多分一市町村あたり 30 か 40 位のサテライト持っていますが、これは六市町村ありますから 300 ぐらいのサテライトがずらっと並んでいるんですね。要は何のことは無い、サテライト紹介の本に載せるといくらか徴収して、それを財政基盤にしているわけです。ちょっと露骨に私も言っていますけどね、いいところも当然ありますから、そういう風に聞いてくだされば いいと思うのですが。残念ながら実はそういう状況なのです。この田園空間博物館整備事業は、エコミュージアムをモデルにしているのですが、残念ながらエコミュージアムについてはあまり理解されていない事例でもあります。日本の場合、うわべだけあるいは形だけを持ってきて、それを支えていくような仕組みが理解されていないと思います。

先ほど紹介にありましたグランドワーク、私はイギリスのグラウンド・ワークというところに、それこそこれも十五年前からずっと関心を持っているのですが、日本でもグランドワーク協会というのができていますが、日本では、グランドワーク・トラストというのは、名前は幾つかありますけれども、イギリスのようなしっかりした仕組みが弱いのです。つまりグランドワークというのは、地域住民と民間企業と行政がパートナーシップを結んで、色んなプロジェクトをやりましょうという、そのプロジェクトだけは真似できるんですけど、それを支えるシステムの問題がいつも疎かになってしまうのですね。

残念ながら農水省の田園空間博物館整備というのも、もう少しエコミュージアムというものを学びながら、事業化をしていくともっと面白いものになるんじゃないかなと思っています。

山形県の朝日町は農村地域ですので、第一世代になると思います。大原さんがバッセーヌのポスターを見せましたけれども、それをモデルに朝日町でも作っているのですが、そのバッセーヌのエコミュージアムを学びながら自分たちでエコミュージアムを進めています。これがコアといわれる施設です。ここはホールや図書館、会議室なども入っています。施設の入り口を入ったところにエコミュージアムの事務所があります。これが事務所の中です。ここは NPO 法人を取得していますし、専任職員も雇用してエコミュージアムを持続的に運営しています。

以前には大正時代だったか、小さな二階建ての洋館が町の中にあったんですね。それをエコミュージアムの事務所に使っていたのです。本当はそういう古い建物を活かしながら、現代的に活用していくというほうが望ましいのです。本当はそちらの方が私はエコミュージアムの事務所としては良かったんじゃないかと個

人的には思っていますけれども、行政的な絡みもあって、大きい施設の一角に、朝日町は事務局を置いています。

ここが先ほどのコアセンターですね。様々なサテライトがこの中にあります。そのひとつに、蜜蝋燭工房はちみつの森キャンドルという、安藤竜二さんのサテライトがあります。自分では、「産業サテライト」と称しています。小さな蜜蝋の工房を持っています。彼のサテライトでは、ここが中心になって様々なコアと連携するのがひとつのモデルでもあるのです。彼のサテライトが中心にしながら様々なサテライトとネットワークを組んでいくんだ、と。それぞれがそういう位置づけになれば、非常にクモの糸のようなきめ細かなネットワークができるわけです。それぞれのサテライトが連携しあうというのが、これからの方向だろうと思います。

ここに彼の蜜蝋の工房があります。こちらの方にはりんごの資料館があって、色んなところにサテライトがあって、自分のサテライトも周りと連携しながら実は在るのだということです。安藤さんというのは非常に面白い、若い時に自分が朝日町出身だというのを、友達に言うのが嫌だったんですね。どこだと言われて寒河江のちょっと先だとしか言えなかった。彼は音楽が好きな青年でしたから、仙台に出て、ライブに行って、そのうち東京で一旗あげて戻ってくるんだ、という考えを持っていたんですね。ある時に、何気なしに朝日町へ戻ってきて、森の中に入って、キノコをいっぱい採ってきたんです。そのキノコを持ってきて、自分のおばあさんにこれを採ってきたよと言ったときに、そのおばあさんは全部それを毒キノコとそうでないのに仕分けたんですね。その時に彼は、こういう人間にはなりたくないと思っていたその人が全部仕分けしてくれるんですね。どうしてこんな力が自分のおばあさんにあるんだろうというのが、まず彼のきっかけだったらしいのです。

それで、朝日町でバッセーヌ・エコミュージアムへ行って、そこに蜂蜜の家というのがあります。ここも今あるか分かりませんけれども、ここが実は面白い人がやっていまして、今日は日本の事例しか持ってきていませんので、スライドをお見せすることは出来ないのですが、旦那さんがタクシーの運転手で、奥さんが工場の労働者だったんです。私が行ったのは 15 年前です。奥さんが工場を解雇されて自分は何をやったらいいかって考えた時に、養蜂が自分の趣味だったんです。フランスというのは養蜂というのが趣味の世界なんですね。ですからパリの市街地で、ベランダに巣箱を置いて蜂を育てて毎朝朝食に使うというのが、向こうの趣味なんですね。たまたまバッセーヌの小さな村、りんご栽培農家の納屋を借りリンゴの蜜を吸わせてもらって、「蜂蜜の家」というのを開店させ、そこをサテライトにしたのです。彼は実は養蜂家の息子なのです。これを見て自分もやはり養蜂を継ごうと決心したそうです。でもバッセーヌの「蜂蜜の家」では、蜂蜜だけでなく、蜜蝋なども作っており、これなら自分でも出来るといってこの工房を作りました。弟さんが養蜂を継いでいるんだろうと思います。自分は蜜蝋をずっとやって、今は東京にもお得意様がたくさんいます。蜜蝋というのは普通の白蝋と違って非常に体に良いんですね。白蝋というのは体に害を与えるそうなんですけど。そういうことをやりながら、養蜂というのを新しい視点で見直して、自分で蜂蜜の森キャンドルというのを立ち上げました。自分でも「朝日町エコミュージアムの産業サテライトです。」と彼ははっきり言います。

次にいって、これは、地元学といって水俣の様々な地域探しですね。水俣で色んな住民がやったものをマップ化したりしています。地元学というのは、水俣からスタートした、住民による調査活動のひとつなのですが、これは最初に見せた岩手をはじめ、様々な地域で取り組まれています。何故水俣でスタートしたかといいますと、皆さんご存知のように水俣病というのが出てきて、世界的な研究者が集まって研究し行くわけですね。医学の面でもそうです。地域づくりでもそうです。公害問題でもそうです。色んな先生たちが来て、調査して、成果を持っていくのです。その成果が地元に残らないじゃないかと思い、だったら自分たちできちっと調べようじゃないかというのが、水俣の地元学のスタートです。

これはエコミュージアムではありませんが、水俣で地元学をやっている人と一緒にエコミュージアムの話をしたら、それは本当に一緒だねという話をしていました。ですから私は、これはかつて繁栄した産業資産のそれに対する再生として第 2 世代だと思います。

第 3 世代文化を担うエコミュージアムとは何かというと、小さな博物館作り、これは清水港の 100 周年記念ですね。何をやろうか、といった時に各商店が持っている様々な宝物を店の前に出そうと。例えばこの眼鏡史博物館というのは眼鏡屋さんなんですね。そうするとショーウィンドウに、メガネの歴史、デザインの歴史ですね、それが分かるように展示をしてあるんです。何のことは無い、それは在庫品でもあるんです。

例えば売れなかったものを並べておく、それだけでも、めがねのデザインの展示になるわけです。同じようにお茶屋さんであれば、高価なお茶道具を持っていると。それを自分たちの宝としてしまっておくのではなくて、店のコーナーに展示したらどうか。そうしたらそれも小さな博物館になるわけですね。左の方にサッカー選手名品館というのがありますけれども、これはスポーツ用品屋さんです。清水エスパルスというサッカーチームがありますよね、そういうのが地元にありますから、選手のサインとか色々あります。小さな博物館＝エコミュージアムかと言われると困るのですが、こんな使われ方もされています。

これはパンフレットだけで申し訳ないのですが、長野市の善光寺というところの商店街に寄ってみたら、表参道の中に街角ミニ博物館というのを作っていました。これも色んな自分達の商品を表に出して、小さな博物館という形でやっています。

それから第４世代へいって、流域や鉄道を軸とした交流連携、これは静岡県の川根地区です。これは本川根町と中川根町、川根町の三つが一緒になって取り組んでいるエコミュージアムです。丸ごと博物館といっていますけれども。それで、ここでは各町にそれぞれがコアを持っています。コアを持つのが良いことかは別にして、拠点施設をそれぞれ持っています。でもこの地域の本当のコアはこの SL です。休日になるとですね、ここ大井川鉄道を SL が通っていくわけです。たまたまここでエコミュージアム研究会の大会をやった時に、私も乗ったんですが、ここの車掌さんが川根町に入ると川根町の説明をしてくれるわけです。民謡も歌ってくれるんです。次の町へ行くと、また次の町の紹介をしてくれるんですね。そうするとこの大井川鉄道がひとつのコアになっているわけです。コアという意識は全く無いでしょうけれども、そういう役割をこの SL は持っています。

その中にこの奥川根というのはお茶の産地です。自分で栽培もしているお茶屋さんが、農家の小さな博物館というのを自分で作って、家の蔵へ行きますと、昔ながらの製茶する工程が見られるんですね。それでこの店先ではお茶も売っています。自分で生葉を生産して、加工・製茶、販売もしていますが、ここへ行くと全部お茶のことが分かるんですね。エコミュージアム全体の中の自分がサテライトであるという意識をすることも大切なことです。

これは先ほど大原さんの報告にもありましたが、エコ多摩川といって、多摩川エコミュージアム構想がまとまりました、というパンフレットです。残念ながら川崎だけで止まっているんですが、私は限定的であっても、一歩取り組むことも大切と思っています。これをどうやって上流まで、あるいは海岸に伸ばしていくのかというのがこれからの課題なのかもしれませんし、この川崎の多摩川エコミュージアムだけで任せてしまうのでは無くて、様々な多摩川を媒体とした様々なグループが連携し合うと、本当の多摩川エコミュージアムになっていくのではないかと思います。

これは同じように三重県の宮川という川がありまして、その流域でエコミュージアムに取り組んでいます。ここでは４つの日本初というのがありまして、１つに流域圏全体をテーマにした取り組みです。これは日本では初めてです。２つには流域案内人を組織しています。地元の人達が各地域の案内をしてくれます。朝日町でも町民ガイドというのを作りました。これはボランティアではありません。ちゃんと有料のガイドとして登録してあって、朝日町でガイドを頼むことができますけれども、この宮川の流域案内の活動というのもすばらしいことです。これはかなりの市町村が集まっていますので、相当の案内人を育成していると思います。

それから３つは人材養成の専門職員の常勤、朝日町にも常勤の職員がいますし、多摩川にもいると思うのですが、ここではちゃんとエコミュージアムに取り組むという人材養成をした専門職員が常勤しているということです。それから４つは県と広域市町村が連携しているということです。これが４つの日本初というキャッチフレーズで、伊勢市から始まって、宮川流域の全ての市町村が参加したエコミュージアムの取り組みです。それから、広域のミュージアムで言えば、四国のアサンライブミュージアムという、土成町、上板町、板野町、３つの町が一緒になって、連携して取り組んでいます。

その他の例で紹介しますと、これは埼玉県滑川町にあるエコミュージアムセンター、タナゴ発見館というところです。ここへ行くと、真ん中に水槽があって、この地域の固有種であるミヤコタナゴを見ることができるわけですね。実はこれだけではなくて、ここでは元々ミヤコタナゴが生息していた、ため池等を取り戻そうという活動をしています。元々は水田などにいたのですが農薬でミヤコタナゴそのものがいなくなってくる。その中で、もう一度それを取り戻そうと、単なる水槽に閉じこめておくのではなく、地域づくりに活かそうとしているのです。大原先生が話してくださった兵庫県豊岡のコウノトリの事例も、それを飼育する

だけではなくて、集落に野生化していこう、というのがひとつの大きな目的になっています。単に水族館に納めるのではなくて、もともとそのものがあった所に戻そう、昔の豊かな地域を取り戻そうとする取り組みです。

これは屋根の無い博物館ということで、農村地域をひとつのエリアとして捉えています。それからこれは滋賀の五箇荘という所の、ぶらり街角という博物館なんですけれども、ここは近江商人の発祥の地なんですね。大きな昔ながらの商家が残っています。それらを大切にして、町をもう一度見直していこうという取り組みが行われています。

それからこれは新潟県の十日町枯木又集落という「日本で一番小さなエコミュージアム」というのをキャッフレーズにしています。ここは十数世帯のぐらいの集落だろうと思います。本当に小さな集落なんですが、このエコミュージアムというのを心の拠り所にして、過疎化が激しい農村集落の中で生き残りをかけた取り組みをしています。数年前に滞在・交流施設「のっとこい」を作りました。そこを拠点として交流が行われていますけれども、ここでは、各家の前にポールを立てて、屋号でそれを表しているんですね。全部家の屋号です。ちょっと写真に載せられなかったのですが、枯木又分校という分校があるんですね。そこの先生をやっていた方が退職して枯木又に住みたいと分校の前に家を建てたのです。その人の家の前には屋号がちゃんと立っています。「学校前」という屋号です。そういう昔の歴史を集落で考えながら、それをどうやって将来的に活用していくのかという、これは屋号のポールだけですが、非常に面白い活動をやっております。

これは八丈島で、これも丸ごと自然博物館ということで、エコミュージアムの名称を使っています。これは八丈島にある自然をマップ化して、それを観察できるような仕組みを持っています。これは東京都が中心にやっていますから、それなりにしっかりした仕組みになっています。それからこれも新宿ミニ博物館マップということで、新宿というのはいろんな顔がありますけれども、本当は江戸の文化を担っていた地域です。大名屋敷もあり、職人町もあり、こういう中でつまみかんざしを作っている所がひとつのミニ博物館になって、紹介しています。今となっては珍しいかんざしの生産工程とか、実際作っている現場を見学する事もできます。これは同じように染めの里ということでやっています。これはすべて民間ですね。自分たちの工房を小さな博物館にして、見学が出来るようになっています。

それから最後の方で日本の事例ではなく、エコミュージアムとは全く関係ないのですが、これは私はサテライトとして面白く、参考になるんじゃないかと思います。これはペイトンという農場のパンフレットです。ここは自分の農場の周りが遊歩道にしています。例えば４番なんていうのは岩塩が露呈しているところです。そうすると牛が自然に寄ってきて舐めているんですね。何故牛がそうしているのかというのがちゃんと表示してあるんです。こちらにいくとアニマルウォッチングができるという看板があります。また、これは昔のサイロなんですが、最後には近代的なサイロがあるんですね。１周すると１間半ぐらいかかると思います。最後には、ホエイという牛乳からチーズなんかを取った残り水、これを１ポンドで売っています。180 円です。何のことはない全然まずい水ですよ。だけど汗を流して戻ってくるとすごく美味しいんですね。そういうことをきちんとビジネスとしているのです。

これは先ほど説明しませんでしたが、エコミュージアムにはディスカバリートレイル(発見の途)というものがあります。これはイギリスですが、イギリスに行くと、どんなに小さな村でも walks around というのがあります。1 周できるルートというのを、大体どんな小さな集落でも作っていますね。これはイギリスでタルカプロジェクトというプロジェクトがあって、それの取り組みのパンフレットです。タルカプロジェクトというのは、ここに書いてあるカワウソの名前です。日本でも「カワウソ物語」という児童書があります。その児童書の小説は地名を刻銘に表示しているんですね。タルカ（かわうその名前）が歩いたところを皆でチェックして、ここはタルカが猟犬と喧嘩したところだとか、この場所はメスのカワウソと一緒に旅したところだとか、小説に出てくる地名を皆で残していっています。これはハザレイという町の事例なんですが、カワウソの足跡が遊歩道になっています。ここで面白いのは、日本では場所を案内しますが、ここではあまり紹介していないのです。ここに番号ありますがこれが説明です。こういうところで曲がってくださいという表示なんです。足元の植物を楽しみながら歩く人もいれば、遠くの景色を楽しむ人もいる。十人いれば十通りの感覚があるんですね。日本のように、ここに行けばあれがあるというのではないんです。こういう形で非常に上手に遊歩道を作っています。こういうのがエコミュージアムでもサテライトを結ぶものとしてできていくと非常に面白いのではないかと思います。

これはロンドンウォークといって、皆さんご存知の方は少ないと思いますが、ロンドン市内で、休日では20 箇所ぐらいのテーマを持ったウォーキングがあります。私はシャーロックホームズが大好きで、ちょうど100年前のイギリスの町の様子も分かり、愛読しているのですが、ここにはシャーロックホームズのウォークというのが3つあります。シャーロックホームズの格好をして、彼ゆかりのパブを歩くなどが行われています。これは土曜日のウォークなんですがこんなに賑うんです。それから夏目漱石の足跡を尋ねるというウォークもあります。有名なパブ巡りのウォークもあります。お化け屋敷を廻るウォークというのもあります。こういうのがロンドンの町の中に無数にあるんですね。皆さん関心がありましたら、英語なんて半分ぐらい分からなくても雰囲気でよく分かります。面白いですよ。こういう地域資源を自分たちで見つけ出して、それを活かしていく。しかもここは一人5ポンド取るんですね。5ポンドというと大体1000円弱です。大体30人ぐらい集まりますから、30000円ぐらいガイドに入るわけですね。ですから有料ガイドになるわけですけれども、非常に面白いやり方です。

それで、日本での展開ですけれども、地域レベルでは地域丸ごと博物館とか、屋根の無い博物館、街角博物館とか様々な名称で動いています。都道府県でも滋賀県では湖国丸ごとエコミュージアムということで、これも私も何回か関わっていますが、今一生懸命頑張っています。岩手県もエコミュージアムの考え方を活かしていこうということで取り組んでいます。市町村レベルでもエコミュージアムの考え方を地域づくりのテーマにしているところは結構あります。国レベルもエコミュージアム整備事業という環境省の取り組みや、デジタルエコミュージアムという、これは私も委員になって参加していましたが、旧国土庁の取り組みがあります。これは何かというとホームページをコアとして、そのホームページを使って、地域を巡るというエコミュージアムの展開を試みる取り組みです。

3 に書いてあるのは、形態だけでなく仕組みが重要になってきているということです。仕組みが重要だから、逆に言えば形態は様々な形態があっていいんじゃないかと思っています。だけど、仕組みが無いままに形態だけがどんどん動いてしまうと、似て非なるエコミュージアムの出現というのもあるのです。ある事業で住民の反対のためになかなかできなかったものが、エコミュージアムという名前で事業が進んでしまうなんていうのもあります。例えばダム建設などの推進にもエコミュージアムは使われそうになりました。エコミュージアムという響きの良い名前によって様々な使われ方もあります。

地域づくりとしてのエコミュージアム

それで私はエコミュージアムの考え方をどうやって地域づくりに活かすかというと、まず環境と経済の統合を目指したサテライト作りということが出来ないかと考えています。環境と経済の統合というのは、冒頭に言いましたが、日本では長い間これらは対立するものだと決め込んできました。環境省の事業に「環境と経済の好循環」という社会実験的な事業も生まれています。環境だけを守るんではなくて、環境と経済の好循環をどうやって作っていったらいいのか、というような取り組みが行われています。

それから滞留･滞在を促し経済性を高める遊歩道づくりということです。先ほどイギリスのパンフレットを見ましたけれども、イギリスは日本以上に車社会です。でも車から降りて歩くということが非常に好きな国民でもあるんですね。当然車で行けば20分ぐらいで通ったところを、歩けば1時間ぐらいかかるわけです。そこでいろんなビジネスチャンスが生まれてくるという、そういう遊歩道づくりです。当然車で行って、お昼になったからご飯を食べようということではなくて、本当に歩いて汗をかいて疲れた時に食べる食事というのはやっぱり美味しいわけですね。そういうことを含めて、滞留･滞在というものを促していようなエコミュージアムも必要だろうと思います。

それからテリトリーには色んな範囲があるといいましたが、サテライトで考えれば基本的には自分たちが知りうる範囲というのが非常に重要であろうと思います。そこで、何をしたら良いのかということです。それからサテライトを紹介する拠点の確保、これは既存

施設の活用とかいろんなことがあると思います。

サテライトって何だろうかといった時に、私はやはり環境、自然との結びつき、歴史の継承、農業、企業との連携、そういう産業も含めて、環境と経済がどう結びついているのか。しかもそこに、学ぶという機能が備わる。これら３つの視点が入っているものをサテライトとして考えていこうということだろうと思います。例えば先ほどの播磨の例で、ラーメン屋さんもサテライトになっていると言いましたけれども、本当はラーメン屋さんであっても、自分たちで地粉を使って地域の農家と連携しながら麺を作っている。野菜も地場の野菜を使ったラーメンを作っているんだということであれば、それは環境と共生です。しかもラーメン屋さんという経済活動をしていますから、充分経済と結びついているわけです。それで来た人にその事をきちっと説明できる、それは学ぶということですね。また、普通のちょっとした飲食店であっても、たまたま来た時は何も無かったけれど、春になれば山菜がいっぱい採れます、秋に来ればキノコ料理が出ます、そういうものを大切にしながら自分たちは飲食店をやっていますということをはっきり言える店をサテライトとして育てていくことも可能です。そういう３つの視点を持っているものをサテライトとして認証していくような仕組みも大切です。

それから私はグリーンツーリズムもやっていますので、グリーンツーリズムとエコミュージアムがどうやったら結びつくかと考えています。皆さんグリーンツーリズムって農村を対象にしたものと考えている方が多いのではないかと思います。グリーンという言葉の意味というのも、緑とか自然とか農村とかのイメージだけでなく価値観を変えるという概念があるようです。私がイギリスでグリーンツーリズムに取り組んでいる事務局長のお話を聞いた時、グリーンというのは、価値観を変えるという概念が入っているんだということを言われました。どういうことかというと、汚いところに緑を植えてその場所を綺麗にするわけですね。ですからグリーンツーリズムというのは、価値観を変えるツーリズムということです。ですから今、グリーンという言葉を使わなくても、地域の再生と地域活性化でツーリズムというのは非常に大きな取り組みになっています。EU でもツーリズムというのを大きなテーマにしています。日本でツーリズムというと、いわゆるマスツーリズムで 50 人 100 人が観光バスで行って、物見遊山で帰って行くのがツーリズムだと思われていますが、ヨーロッパではツーリズムといったら、環境と結びついたツーリズムが少なくありません。ですから日本の農山村では、人口が減少している地域でエコミュージアムに似た取り組み、そこへ人が来て、一緒に交流したり、その地域を一緒になって作っていっているという事も可能です。

そういうことを考えると私はエコミュージアムのサテライトと言った時に、そのサテライトは環境と経済が統合していなければいけないのですが、その経済活動をやる時には、そこから支えられる経済性をどうやって作っていくのかというのがそのサテライトの運営にとって重要だと思います。逆に周りから見れば折角地域の宝、あるいは地域の歴史を保全して、それを活用して、継承していこうというサテライトを皆が支えるということになっていかなければ、成り立たないと思います。そのためにはやはり、地域から支えられる経済性というのものを作っていくと同時に、それを皆が支えていくよう経済性をどうやって作っていくのか、これが実は環境と経済が統合する経済性だろう思っております。

最後になりましたが、なかなか日本ではこれといってエコミュージアムの優秀事例というのはありません。私は最先端を進んでいるのは朝日町だと思いますが、朝日町も今、最先端がゆえに色んな壁にぶつかっているようです。私も山形で仕事をしていますのでたまに行くのですが、色んな悩みを抱えながらやっています。でも、エコミュージアムというのはそういうものだと私は思うんですね。完成されたものではなくて、常に動いていくようなものがエコミュージアムではないかと思っています。こういう環境と経済が結びついた地域づくりこそが、新しい、これからの地域づくりの方向性じゃないかと思っています。以上です、どうもありがとうございました。

＜質疑応答＞

質問者 A：まちづくりを考える時に昔の村の単位から文化を起こしていくことはできないでしょうか？歴史的な観点からそういったものを見直すことはできないでしょうか？

井原氏：確かにそういう発想はすごく重要で、どこへ行っても神社の氏子というのはちゃんといます。氏子は大体一定のエリアの中に住んでいるわけですね。その例大祭に氏子がどういう風に関わっていくのかというのも、エリアとしては昔の集落のエリアではないの

ですが、それを支えていくようなエリアというのが都市の中には必要だろうと思います。

コミュニティーという言葉は非常に難しくて、都市の中では 2 つの意味があると思うのです。ひとつは何々の地域という意味、地域の地域社会です。これははっきりしていて何々町とかです。もうひとつはネットワーク型の地域社会でしょう。例えば仲間とか同好者とか、そういうものがこれからのコミュニティーの形になっていくのではないかと思います。コミュニティーの再生というのは、昔の集落内の関係とはちょっと違うのですが、そういう意味では必要だと思っています。どうやってコミュニティーを作っていくのかということです。

補足しますと、コミュニティーの再生は、ヨーロッパにおいては最大の課題です。EU でもコミュニティーの再生については莫大なお金をつぎ込んでいます。たまたま去年の 9 月にアイルランドに行って、リーダープロジェクトというプロジェクトを見てきました。これは 95 年ぐらいからスタートしている地域のコミュニティー再生です。アイルランドですから日本の北海道よりちょっと人口も面積も小さい国で、それが 7 つのブロックに分かれているんですね。1 ブロックで 200 ぐらいのプロジェクトが動いているんです。それはコミュニティー単位のプロジェクトです。コミュニティーグループが色んなプロジェクトを動かしているんですね。実は EU 全体でいうとそれが 1000 地区ぐらいあるんですね。1 地区で 200 ぐらいですから、200000 ものコミュニティープロジェクトが動き始めています。私はこういうことが地域の活力だろうと思っています。そういうのをよく見ると、エコミュージアムと非常に似ているんですね。アイルランドでしたら農業が大変でしたから、つぶれた井戸をもう一度復活させて、それを皆で再認識しようだとか、ビートを掘った後の再利用をどうするかとか、ですからひとつの地域の中がエコミュージアムと言っていいぐらいの動きがあるんですね。そういうのがこれからのサテライトになっていくのではないかと思います。そういうところでエコミュージアムという視点を持った時に、もっと面白い展開ができるんではないかというのが私の考えです。

先ほど紹介した新宿の例などはエコミュージアムの視点は多分持っていないのでしょうが、そこにエコミュージアムの視点が入った時に、どんな展開ができるのだろうかというところがこれからの課題じゃないかと思っています。

質問者 B：先ほど事例の説明で第 1～4 世代という紹介は多分間違っています。第 1 分類～第 4 分類という風に理解してはダメですか？第 1 世代というと古いもので、捨てられていくものという印象がありますが、そうではないとお話から理解したのですが、間違いですか？

井原氏：この世代といったのは、荒井重三先生という今は亡くなられましたが、先生からお聞きしました。これは時代の流れの発展過程だと思います。日本では第 1 世代があったかというと、今は第 1～第 4 世代までが同時に動いているんですね。

ですからおっしゃるように、第 1 分類、第 2 分類･･･と理解しても問題は無いと思います。実際に動いているところを類型化するやり方もあるわけですから、そういう分け方をされても別にいいのではないだろうかと思います。これは決して無責任に言っているわけではなくて、どう捉えるかの問題だろうと思います。

（―会場、拍手―）

＜講師プロフィール＞

井原 満明（いはら みつあき）

株式会社 地域計画研究所　代表取締役

1948年福島県生まれ。都市と農村地域でのまちづくりに関わる。英国のグラウンドワークなど地域づくりを進めるためのトラスト(非営利組織)等に関心を持ち、地域でのまちづくり組織などの設立を支援し、関わっている。数年前から岩手県東和町ＴＭＯ（まちづくり会社）を3セクで立ち上げ、その運営に関わり毎週通っている。共著「地域再生のまちづくり・むらづくり」「ＮＰＯ基礎講座３」国交省「地域振興アドバイザー」、ＮＰＯ「日本グリーンツーリズムネットワークセンター」理事